

病害虫発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稻	いもち病 紋枯病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病(県北部) ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ ニカメイガ イネミスズウムシ	並 並 並 並 並 並 並 並 並 や や 少	カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアザミウマ アブラムシ類	並 並 並 並 少 少
			カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 カキクダアザミウマ チャノキイロアザミウマ フジコナカイガラムシ	や や 少 少 少 並 並 少
ウリ類	モザイク病 べと病 うどんこ病 疫病 つる枯病	並 や 少 並 並 並	モモ	せん孔細菌病	多
			野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	並 並 少 や

気象予報

1か月予報(予報期間 5月24日から6月23日 大阪管区气象台)

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%) >



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

		月平均気温(平年値) (°C)		月降水量(平年値) (mm)
6月	和歌山	23.0	和歌山	189
	潮岬	22.0	潮岬	352

I. 水 稲

1. いもち病(苗いもち、葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、キヌヒカリ、コシヒカリなどの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. 紋枯病 県南部

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温が高まると病勢が進展するので常発地では発生に注意する。

3. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病(県北部) 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭(平年:いずれの地域も0.1頭)であった。

② ヒメトビウンカ(越冬世代)の縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市で12.2%(過去7年の平均15.8%)、かつらぎ町で12.0%(過去7年の平均14.9%)であった。

③ 県北部の本田における前年の縞葉枯病の発生面積は767ha(平年895ha)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭(平年:紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0.1頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年にツマグロヨコバイの発生が多かった地域では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱施薬剤を施用する。

5. セジロウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0.2頭、上富田町1.2頭、那智勝浦町0.8頭、初飛来の平年：5月21～25日）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱施薬剤を施用する。

6. トビイロウンカ

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町のいずれの地域も0頭（平年：いずれの地域も0頭、初飛来の平年：7月6～10日）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 田植え時に有効な成分を含む育苗箱施薬剤を施用する。

7. ニカメイガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：いずれの地域も0頭）であった。
 - ② フェロモントラップ（紀の川市）の5月1～20日の誘殺数は、0頭（平年0.2頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 前年に発生が認められたほ場では、田植え時に有効な成分を含む育苗箱施薬剤を施用する。

8. イネミズゾウムシ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0.1頭、上富田町11.5頭、那智勝浦町12.1頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 有効な成分を含む育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは50株あたり成虫数が12頭を越える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ類>

1. モザイク病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（過去6年の平均：施設キュウリ4%、露地スイカ0%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（過去6年の平均：いずれも0%）であった。
 - ③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は13%（平年49%）であった。
② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は50%（過去6年の平均61%）であった。
③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
② 薬剤防除は予防散布を重点に、葉裏に十分かかるように行う。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は6%（平年33%）であった。
② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は90%（過去6年の平均76%）であった。
③ 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均0%）であった。
④ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 施設栽培やトンネル栽培では通風をよくし、薬剤防除は薬液が葉裏にも付着するよう丁寧に散布する。

4. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均0%）であった。
② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去6年の平均0%）であった。
③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。
② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

5. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均0%）であった。
② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去6年の平均0%）であった。
③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布は株元中心に行う。

＜野菜全般＞

1. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は71%（平成58%）、1葉あたり寄生虫数は0.1頭（平成0.2頭）であった。

② 黄色水盤（紀の川市）の5月1～20日の飛来数は151頭（平成89.8頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率79%（平成57%）、1葉あたり寄生雌成虫数は0.7頭（平成0.4頭）、ナミハダニの発生ほ場率57%（平成30%）、1葉あたり寄生雌成虫数は0.2頭（平成0.3頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生は0%（平成：発生ほ場率28%、1葉あたり寄生虫数0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は4～5日間隔で、2回以上連続散布を行う。

② ハウス栽培は収穫終了後に、蒸し込みを行う。

Ⅲ. 果 樹

＜カンキツ＞

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 5月下旬に薬剤散布を実施していない園では早急（6月上旬）に防除を行う。

② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、1回目散布後の累積降水量が250mm程度となった時点で次の散布を行う。

③ 伝染源となる枯れ枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬病斑量（前年の春葉における発病葉率）は14.7%（平年19.9%）であった。
- ② 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の初発は5月21日（平年5月23日）であった。
- ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 銅水和剤の予防散布を行う。散布時には薬害軽減の策を講じる。
 - ② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

3. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の寄生葉率は0%であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行なうと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期

第1世代1令幼虫最盛期	6月2半旬	（平年6月1半旬）
同 2令幼虫最盛期	6月5～6半旬	（平年6月4～5半旬）
同 雌成虫初発日	6月6半旬	（平年6月5半旬）

 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）での第1世代1令幼虫の初発は5月22日（初発日の平年：5月17日）であった。
 - ② 昨年10月の県北部（海南市下津町）、県中部（有田地域、みなべ町を除く日高地域）および県南部（田辺市）における発生園率は5%（平年7%）、発生果率は0.3%（平年0.4%）であった。
- (3) 防除上考すべき諸点
 - ① 多発園では、2令幼虫最盛期（県予察ほ場では6月5～6半旬）にマシン油乳剤や有機リン系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（日高郡由良町）における黄色粘着トラップでの5月16～20日の誘殺数は、8頭（過去5年の平均37.2頭）であった。発生時期は平年よりやや遅かった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 地域での発生消長調査の結果により、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の寄生葉率は0%で、各地域においても発生時期は平年よりやや遅く、発生量は平年よりやや少なかった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 各園地の発生状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」の発病葉率は21.9%（平成34.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 伝染源となる病斑上の分生子は、6月に入ると活発に形成され伝染を繰り返す。分生子は葉裏の気孔から侵入するため葉裏にも丁寧に散布する。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報根拠

① 県北部における前年10月の「富有」における円星落葉病の発病葉率は0.5%（平成4.5%）、角斑落葉病の発病葉率は7.1%（平成23.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 円星落葉病の子のう胞子の飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

② 防除は有機銅水和剤、マンゼブ又はマンネブ水和剤とする。

3. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（紀の川市）における黄色粘着板による4月1日～5月15日の誘殺数は11頭（平成9.4頭）であった。

② 5月中旬の越冬成虫による被害葉率は「富有」で0.1%（平成0.1%）、「刀根早生」「平核無」で0%（平成0.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

4. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（紀の川市）における黄色粘着板による4月1日～5月15日の誘殺数は9頭（平成7.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

5. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 5月中旬の「富有」の寄生花蕾率は0.5%（平成1.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 孵化幼虫の成育ステージがそろそろ6月上中旬の防除が重要である。多発園では散布量を多くして、丁寧に散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月中旬の発病園率は60%（平成42%）、発病葉率は1.5%（平成1.6%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 降雨前の予防散布に努める。
 - ② 防風ネット、防風樹を設置するなどの防風対策を励行する。

< 果樹全般 >

1. カメモムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 落葉中におけるチャバネアオカメモムシの越冬成虫数は、県内47地点において落葉50リットル当たり2.1頭（前年0.1頭、平成0.3頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は51.1%（前年6.3%、平成16.0%）であった。
 - ② みなべ町東本庄の予察灯での5月16～20日の誘殺数は、チャバネアオカメモムシが359頭（前年9頭、過去4年平均6.5頭）、ツヤアオカメモムシが1,978頭（前年45頭、過去4年平均33.3頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 果樹カメモムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
 - ② ウメの被害には品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。カンキツでは蕾、花を加害するので、被害状況を観察して防除する。
 - ③ 農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメモムシ情報や各地域のJA等の調査情報を参考にし、対応する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>